ISSN-1880-4799 信州短期大学紀要, 第 20 巻, 75-78（2009.3）

教育事例

施設介護実習が介護福祉士を目指す学生に与える影響

―第 2 段階施設介護実習終了後アンケートの評価―

伊藤希久美, 矢羽田明美, 丸紀和子, 根本秀美, 関口昌利, 加藤みち代（信州短期大学）

The practice with the welfare facilities : about the influence given to the student who aims at the care worker.

From the questionnaire evaluation after the Welfare facilities practice ends

Kikumi Ito, Akemi Yahata, Kiwako Maru, Hidemi Nemoto, Masatoshi Sekiguchi, Michiyo Katou（Shinshu Junior College）

***Abstract*:** The student can obtain a lot of learning by the welfare facilities practice. Therefore, the influence that the welfare facilities practice has on the student is large.This time, the questionnaire survey of goodness in the practice compared with the student after the practice ended, impression, and the opposite embarrassment and serious was done.As a result, because it was understood that it was important to straighten the learning environment of the student who practices the welfare facilities, it reports to here.

***Key words*:** Care worker, practice guidance, Care Student, Studied environment, Care worker education

Ⅰ. はじめに

介護福祉士国家資格取得には、学内での講義に加え、養成過程 2 年間で合計 450 時間の介護施設実習が厚生労働省からの規定として定められている。実習時間以外について（実習の構成、実施時期、実習施設の選定等）は、各養成校のｶﾘｷｭﾗﾑにあわせた構成が可能であり、A 校においては、第 1 段階施設介護実習（1 学年後期･12 日間）･第 2 段階施設介護実習（2 学年前期･21 日間）･第 3 段階施設介護実習（2 学年後期･23 日間）、居宅介護実習（2 学年前期･2 日間）と設定し、特別養護老人ﾎｰﾑ･介護老人保健施設･身体障害者療護施設･指定障害者支援施設･救護施設、居宅介護事業所の 4 職種の施設＋1 訪問介護事業所において実習を行っている。

介護施設実習について澤田らは「学内で学んだ講義や演習等を具現化する場として、介護福祉教育の根幹をなし、その効果は計り知れないものがある」[3)]としており、介護施設実習が学生に与える影響が大きいことを示している。実際に A 校学生においても、実習を通して、講義や演習の中で学んだ知識･技術を実践し、日々変化する利用者の個別性を考えた介護展開を行っていくことの大切さや、ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力･介護技術の向上、介護福祉士としてのあり方、職業意識を高める、など様々な事柄を学んでいる。その分、学生一人ひとりに与える影響は大きく、場合によっては進路変更を考える学生がいるのも確かである。

澤田らは、介護実習教育に与える影響因子として「1.養成校の教育理念と教育力」「2.実習受け入れ施設の体制と指導力」「3.ｻｰﾋﾞｽ利用者、家族とのかかわり」「4.学生間における人間関係、学習目標達成に向けた意識の共有化」[4)]を挙げている。

今回は、今後の介護実習指導に活かすことを目的とし、第 2 段階施設介護実習終了後の学生に対し、第 2 段階施設介護実習についてのｱﾝｹｰﾄ調査を行い、澤田らの挙げた介護実習教育に与える影響因子について考察を行った。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象：2008 年度第 2 段階施設介護実習（以下第 2 段階実習と略す）を行った 2 学年学生 43 名
2. 実習期間：2008 年 5 月 9 日～6 月 6 日までの 21 日間
3. ｱﾝｹｰﾄ実施時期：第 2 段階実習終了後第 1 回目（実習終了後 6 日目）の授業内において実施
4. 方法：質問紙法を用い、授業時間の中で回収
5. 倫理的配慮：ｱﾝｹｰﾄは実習終了後の個別指導も兼ねていたため、記名式としたが、今回の研究に当たっては、記名は関係なく、個人が特定されないよう一括して集計を行った。学生に対しては、上記内容を説明の上、同意を得た
6. 調査内容：「1.第 2 段階実習の中で良かった事・感動した事・嬉しかった事」「2.第 2 段階実習の中で困った事・辛かった事・大変だった事」について、「①利用者と接して」「②指導者及び施設職員と接して」の2方面より質問、解答は自由記述（複数解答可）とした。
7. 分析方法：記載内容について kJ 法を用いて分類し、分析検討を行った

Ⅲ. 結果

ｱﾝｹｰﾄ回収率は 65.1％（学生 43 名に配布し 28 名回収）であり、質問項目ごとに自由記述された意見を全て拾い上げ、kJ 法を用いて分類を行った。

1. 第 2 段階実習で良かった事、感動した事、嬉しかった事について

「①.利用者と接して」（図 1）については、「ありがとう、と言ってもらえた」「実習終了時に、寂しくなるね、と言ってもらえた」などの「利用者さんから掛けられた言葉」によって実習に対するプラスの感情を抱いた、と言う意見が 21 件(42.9％)で最も多かった。次いで、「名前・顔をおぼえてもらえた」「名前で呼んでもらえた」などの「自分を認識してくれたこと」が 12 件(24.5%)、3 番目には「笑顔で話してくれた」「手を握ってくれた」「始めは声を掛けても返してくれなかったが、毎日関わることで反応が返ってくるようになった」など「利用者さんの反応や感情表現」が 11 件（22.4%）、4 番目として「介護過程を行って、思っていたよりも出来て驚いた」「（介護計画を通して）やって良かった」などの「ケアを通して喜んでいただけた」ことが 5 件（10.2%）、挙げられている。

「②指導者及び施設職員と接して」（図 2）については、適切なｱﾄﾞﾊﾞｲｽを頂き、ｽﾑｰｽﾞに実習ができた」「どの職員についても、指導の仕方が同じで、わかりやすくとても親切に熱心に指導していただいた」などの、「指導内容、指導の仕方」についてプラスの感情を抱く学生が 17 件（50%）と、とても多かった。次いで、「『分からなくて当然なのだから、しっかりと聞いて勉強して欲しい』と言われ、気持ちが軽くなった」「入浴介助後に『あなた器用ね。これからもっと伸びるわよ。頑張ってね。』と言っていただいた」など、「指導者及び職員の方から掛けていただいた言葉」が 8 件(23・5%)、3 番目には「介護技術で分からなかったことをたくさん教えてもらい良かった」「介助について、考えてやらせて頂いた」などの「介護技術について」が 4 件(11.8%)、次いで「コールがなった瞬間に反応し対応している職員の姿を見てとても凄いと思った」「どんな時も、利用者さんのことを考え接しているので、自分も同じように介助していきたいと思った」などの「職員の介護に対する姿勢」が 3 件(8.8%)、「その日の担当でなくても困っていると声を掛けてくれた」「体調を崩したときに心配していただいた」などの、「学生に対する心遣い」などが 2 件(5.9%)挙げられている。

2. 第 2 段階実習の中で困った事、辛かった事、大変だった事について

「①利用者と接して」（図 3）については、認知症利用者への対応、利用者とのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ・介護技術のいずれかについて、大変であったと回答している。少数意見の中には「利用者からのｾｸｼｬﾙﾊﾗｽﾒﾝﾄ」（1 件）について挙げている学生もいた。

「②指導者及び施設職員と接して」（図 4）については、「看護実習生に対する態度と、私たちに対する態度が違う指導者がおり、非常に落ち込んだ」「実習生を忘れられていた」「担当の指導者なのに、助言もせずただ付き添うだけの人がいて困った」「気がつくと、一人にされてしまい困った」など、実習指導者・職員の方の実習指導内容についてが、14 件(73.7%)と最も多かった。少数意見の中には、「（自分の）腰痛がひどく、職員さんに迷惑を掛けてしまった」「ミキサー食の利用者に対し、全部混ぜてしまう傾向があり、良くないのではと思ったが、言えなくて困った」が、挙げられていた。

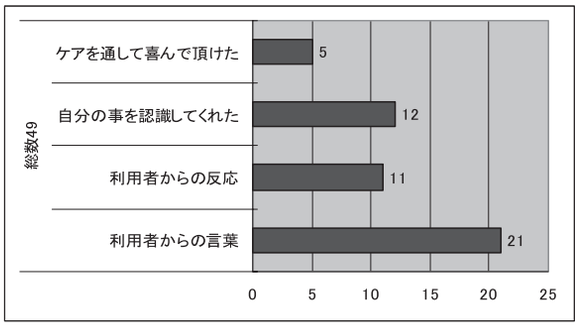

図1　利用者と接して良かった事・感動した事・嬉しかった事

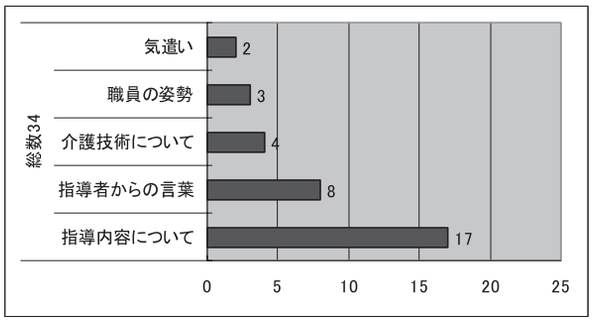

図2　指導者及び施設職員と接して良かった事・感動した事・嬉しかった事

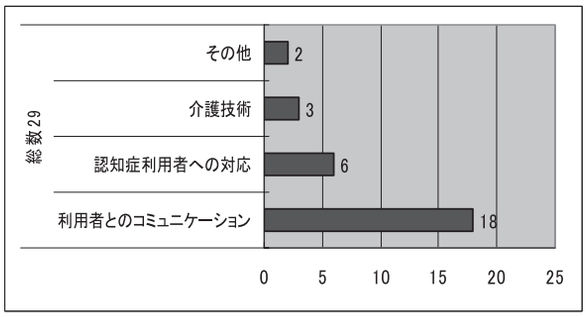

図3　利用者と接して困った事・辛かった事・大変だった事

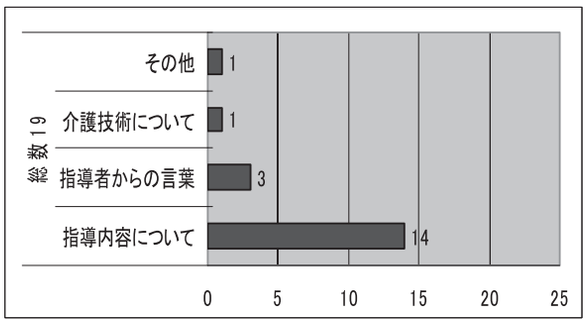

図4　指導者及び施設職員と接して困った事・辛かった事・大変だった事

Ⅳ. 考察

上記の結果について、3つの視点より考察する。

1.「項目ごとに抽出された、回答数からの比較」

単純に、抽出された意見数を図にすると図 1～4の結果が得られた。この事より、「困ったり辛かった事」もたくさんあったが、利用者とのコミュニケーションを通して「感動した、嬉しかった事」を実感する学生がとても多く、その中でも特に、利用者から掛けられた言葉や、自分を認識し存在を認めてくれた事に対する、喜びが大きい事が分かった。

澤田らも「実習という緊張した環境下で出会う高齢者の人間的あたたかさや、学生を無条件に受け入れてくれる高齢者の存在は、学生の感性に深く染み込み、人間的なふれあいを実感させてくれる」[4)]と述べているように、緊張や不安の大きい中で実習を行っている学生にとって、自分の存在を認め、言葉や反応によってそのことを表現してくれる利用者の存在は大きな心の支えであり、実習に対するプラスの印象や意欲を与えるとともに、居心地の良さや安心感を抱いていることが考えられる。

2.「利用者と接して、良かった事・感動した事・嬉しかった事と、困った事・辛かった事・大変だった事との比較」

利用者とのコミュニケーションを通して、感動や喜びを抱いている一方で、利用者とのコミュニケーションに苦慮している学生は多い。特に、「認知症利用者とのコミュニケーション」や、「障害を持った方とのコミュニケーション」について、難しいと言う意見が多く挙げられた。学内の講義・演習を通して、基本的対応や姿勢については学ぶものの、実際の場面においては、基本通りにコミュニケーションが進むことは少なく、一人一人・その場その場に合わせた対応が求められる。そこには、相手の全体像（身体的・社会的・精神的側面を含む）の把握、アセスメントがいかにされているか、その時のお互いの身体的精神的状態や感情、時間・場所・環境等、様々な要素が影響因子となり、一度と同じ背景が設定されることはない。経験を通して感覚としてつかんでいくものもあるが、学生の立場である以上、まずは多くの利用者とコミュニケーションを取り「難しい」と感じる場面を大切にする事、更に「どうしたら良いのだろう・より良いケアを提供する為には、どんなことが必要だろうか」と気付きを深める事が重要であると考える。

ここで重要なのが、教員・実習指導者・職員の支援である。学生の「気付き」を大切にし、一緒に振り返り、考え、学びを支援していく姿勢が必要であると考える。振り返りや、関わりを通して得た情報を基に、コミュニケーションを図り、その方とのより良い関係が

築けると、この経験は学生にとって大きな喜びとなり、感動や実習への意欲へとつながっていくのだと考える。また、「困った事・大変な事」があるからこそ、考え・学びを深める事ができ、「良かった事・感動した事」が大きな印象として残るのではないかと考える。

3.「指導者及び施設職員と接して、良かった事・感動した事・嬉しかった事と、困った事・辛かった事・大変だった事との比較」

挙げられた意見を比較すると、とても対照的である事が分る。今回のｱﾝｹｰﾄにおいては、実習指導者の背景、職員の構成、実習指導体制等については調査をしていない為、分析していくうえでの限界はあるが、抽出された意見を分類していくと、関わる職員の対応・言葉によって、「感動した・嬉しかった」と「困った・辛かった」が、対比している。これは、施設実習に対する、職員の認識からくる違いなのではないかと考える。

現に、多くの介護福祉施設においては、限られた職員数の中で、最大限のケアを提供するに当たり、日々の忙しい業務の中で学生の受け入れを承諾していただいている。そのため、実習指導につく職員の背景も異なっており、全職員が介護学生に対し、同じだけの関わりを持つことは困難な部分もあると考える。しかし、介護実習生とは学ぶ存在であり、澤田らも実習指導について「学生を育てるという『教育的視点』に基づいたものであることを全職員に認識出来るよう工夫していく必要がある」[5]としているように、実習が「職業教育・職業訓練」とならないよう、学生を同じ職業につく仲間であることを認識し、より多くの経験、知識・技術の習得、助言を通して、学びが深められるような実習環境を整えることが求められる。

また、三浦らが「適切な実習指導によって職業人としての自らの姿をイメージし、意欲的な成長をみせる学生もいる」[6]と述べているよう、A校においても職員の利用者に対する姿勢を通して、同じ職業を目指す上での良きﾓﾃﾞﾙとして認識をする学生もおり、実習指導者及び施設職員によって、自分の将来像や職業意識の構築を図るなど、職業ﾓﾃﾞﾙとして施設職員が学生に与える影響の大きいことも示唆される。

Ⅴ. まとめ

今回のｱﾝｹｰﾄ調査より、学生は利用者からの言葉や反応によって、学生としての存在を認められることに大きな喜び・感動を感じている事が示唆された。また学生は、介護福祉士を目指す学生として「学ぶ存在」である事を実習に関わる総ての者が認識をし、教育的視点をもち関わることで、介護施設実習への意欲が高まり、その先の介護観や職業観へと繋がる実習が出来るのではないかと考える。

今回の研究においては、利用者・実習指導者及び施設職員との関わりの 2 つの視点からしか調査を行っていないため、教員との関りについて検討が出来ていないが、学生がよりプラスの感情を持って意欲的に施設介護実習を行う環境を整える上においても、養成校教員の感性や実習に対する意識、より良い実習環境づくりへの調整努力は不可欠であると考える。また、三浦らが「実習指導に伴う施設内外教育の必要性」や「実習指導者自身の実習に対する意欲と意識の向上」「養成校と実習指導者・実習施設との連携の必要性」[6]について述べているよう、実習施設との橋渡し役として、実習施設・実習指導者と共にも、より質の高い、介護福祉士養成に向けた、取り組みを行っていく必要があると考える。

今回の結果をもとに、更により良い施設介護実習環境を整えられるよう、研究を進めていきたいと考える。

[投稿 2008 年 11 月 18 日、受理 2008 年 12 月 15 日]

〔参考文献〕

1）川廷宗之,『社会福祉教授法』,川島書店,1997.
2）介護福祉実習指導研究会編,『介護福祉士選書 18 介護実習指導』,建帛社,2007.

〔注〕

3）澤田信子　小櫃芳江　峯尾武巳編,『可能性を信じ共に学び・育ち・創る　改訂・介護実習指導方法』,社会福祉法人　全国社会福祉協議会,p76,2006.
4）澤田信子　小櫃芳江　峯尾武巳編,『可能性を信じ共に学び・育ち・創る　改訂・介護実習指導方法』,社会福祉法人　全国社会福祉協議会,p92～95,2006.
5）澤田信子　小櫃芳江　峯尾武巳編,『可能性を信じ共に学び・育ち・創る　改訂・介護実習指導方法』,社会福祉法人　全国社会福祉協議会,p156,2006.
6）三浦久美子　足立恵子　福嶋正人,『実習現場における指導者の現状と教育課題』,介護福祉教育, 第 12 巻第 1 号(通巻第 22 号), p32～37,2006.